

キーツ研究一筋に

岡田章子教授退任記念号の刊行にあたって

英語英米文学会会長 橋 内 武

国際教養学部 of 岡田章子教授はこの2010年3月末日をもってめでたく定年のためご退任になられる。教授は桃山学院大学英語英米文学会の前会長（2007年4月～2009年3月）であられた。長年にわたる本学会と本学への貢献を称えて、本号の『英米評論』を岡田章子教授退任記念号として刊行することにした。以下に、その略歴と主な研究業績を紹介して献辞とする。

岡田章子教授は、大阪女子大学学芸学部英文学科を1962年に卒業、1967年に米国・南カルフォルニア大学大学院修士課程（英文学専攻）に入学、翌年サンディエゴ州立大学に転学して英文学を専攻し、1971年1月にMAの学位を取得した。留学当時「ロマン主義文学」と「キーツ」のセミナーを受講したGeorge C. Gross教授とは音信が続いており、下記の単著2と3にはこの恩師による「はしがき」(Preface)が載っている。羨むべき師弟関係ではある。なお、2007年10月には大阪大学より博士（言語文化学）の学位が授与された。ご同慶の至りである。

桃山学院大学との関係は、1975年度に非常勤講師としてインテグレーション科目を担当したのが始まりである。専任教員としては、1977年4月に経営学部助教授として採用され、1986年には経営学部教授に昇任された。その後、文学部の新設（1989年）や文学部改組による国際教養学部の誕生（2008年）に伴い、所属学部は次々に変わったものの、実に33年の長きにわたり本学で英語・英文学の教育と研究に携わって来られた。この間に学生たちを熱心に指導し、私たち同僚を啓発してくださったことに対して深く感謝の意を表す次第である。

岡田章子教授の専攻分野は英文学（詩）である。イギリス・ロマン派の詩を愛読され、特にジョン・キーツ（John Keats, 1795-1821）の作品と伝記の研究に長年取り組んで来られた。代表的な著書（単著）には、次の3点がある。

1. 『キーツの詩』, 京都・あぼろん社, 1986.
2. 『魔法と妖精——イギリスロマン派の詩人達』, 京都・あぼろん社, 1991.
3. *Keats and English Romanticism in Japan*, Bern: Peter Lang, 2006.

このうち、1と2は英文学専門の出版社である京都のあぼろん社から刊行されたものである。いずれも主に本学の紀要に載せた論文をもとに、研究書に仕上げたものである。1は桃山学院大学出版助成金を得て刊行されている。その「まえがき」によれば、「キーツは彼の短い生涯において、『美とは何であるか』、『真実とは何であるか』、また『美と真実の関係はどうなっているのか』をたえまなく模索し、その過程を自らの手紙の中で綴り、詩作において実践してきた」という。全8章（182pp.）からなる本書によって、岡田教授はキーツ学者としての地位を確立したのである。

他方、2の書名『魔法と妖精』は何やら謎めいているけれども、「ロマン派詩人達が好んで魔法や妖精を題材として用いたことにちなむ」（あとがき）という。副題に「イギリスロマン派の詩人達」とあるが、第1章はイギリス・ロマン派の総論、第2章はワーズワースの物語詩、第3章はバイロンの「マンフレッド」に焦点を当てているのに対して、第4章以降の7つの章はもっぱらご自身によるキーツ研究の成果が盛り込まれている。「ロマン派の詩人達」としたものの、キーツ研究に最も力が注がれていることは明らかである。表題はさておき、2は1以降に発表された論考を集めた「第2論文集」である。

3は達意な英文でしたためられ、スイスの学術出版社 Peter Lang から上梓されたものであり、1と同じく本学学術出版助成金を得て刊行されている。特筆すべきは、本書によってキーツを始めとするイギリス・ロマン派詩人が

日本においてどのように受容されてきたかについて広く世界に知らしめたことである。この英文著書は *Keats-Shelley Journal*, *Keats-Shelley Review*, 『英語青年』, 『桃山学院大学紀要』 に発表された下記の論文などをもとにまとめられたものである。

- ① “Japanese Scholarship on Keats”
- ② “Translation of Keats’ Poetry in Japan”
- ③ 「日本のキーツ受容と将来」
- ④ “Reception of Romanticism in Japan Before World War II”
- ⑤ “Reception of Romanticism in Japan After World War II”
- ⑥ “The Medical Aspect of Keats”
- ⑦ “Guy’s Hospital and John Keats”

その他、ジョン・キーツの伝記的研究には「Keatsの伝記一考」や「Keatsの徒歩旅行」もあり、『桃山学院大学人間科学』誌上に発表されている。

ご著書の2 (pf.201) と3 (p.79) によれば、キーツの名が日本の書物に初めて登場したのは、Samuel Smiles, *Self-Help* (1859) の訳書である『西国立志篇』(中村敬太郎 [敬字] 訳, 1871) の中であるという。(但し、“Keats was a draggist” とあるのを中村は「其子ハ^{キーツ}売薬商ノ子ナリ」と誤訳している。貸馬車屋の子が医業を志して天才詩人になったという点で自助論に入れるべき人物なのだろう。) ——以来140年の年月が経つ。

岡田教授も書いておられるように、ロマン派の詩人達は都会の喧騒から離れたあるがままの自然を愛し、古代ギリシャ・ローマの神話的世界に憧れ、個人の内面の発露や空想的創造を重んじた。——私自身はるか昔に英国にあって、湖水地方やスコットランドを彷徨し、ロンドンにしげしげと通っては、文豪や詩人の旧宅や碑文を見て回ったものである。中でもキーツ館 (Keats House) の繊細で優雅な佇まいには魅了された。イタリアのローマを旅しては、スペイン広場 (その際にキーツが最期を過ごした邸宅が残る) などを訪ね歩いたこともある。ローマ郊外にあるキーツの墓石には、“Here lies one whose name was writ in water.” (「水に書かれた名の者ここに眠る」) と刻ま

れている。——この献辞を書くに当り、結核のため夭逝したキーツの足跡を追憶しつつ、イギリス・ロマン派（ワーズワース、コールリッジ、バイロン、シェリーなど）の名詩に改めて接し、自らが新米教師の頃に立ち返ることができた。英詩は英語教師にとって不可欠な教養であるからである。

最後に、美の詩人・キーツの名句を2つ挙げて、その豊かな感受性と美的感覚を再認識しておこう。

・ A thing of beauty is a joy for ever:

Its loveliness increases.

美しきものは永遠とこしえの喜びにて

その愛らしさは増してゆく。

——*Endymion* (1818)

・ “Beauty is truth, truth beauty”——that is all

Ye know on earth, and all ye need to know.

「美は真なり、真なり美」——これぞこの世で

知るすべて、知るべきすべて。

——“Ode on a Grecian Urn” (1819)

岡田章子先生、どうか末長くキーツの世界を我々後進の者に伝え続けてください。

——はるばるとキーツ訪ねて岡田山

庭斎(橋内 武)